

# 小原國芳の道德教育論の性格と今日的意義

—— 混迷する道德教育からの脱却を目指して ——

山口圭介（教育学部）

小原國芳・道德教育・修身教授・道德教授の根本問題

## 1. はじめに

2014年10月、中央教育審議会が「道德に係る教育課程の改善等について」の答申をおこない、現行においては、教科外の活動として位置づけられている小・中学校の「道德の時間」を「特別の教科」（仮称）に格上げすることが提言された。これを受けて、文部科学省は、学習指導要領の改訂や検定教科書の作成に必要な準備をすすめるなど、早ければ2018年度から「道德の時間」が教科化されることになった。このような動きのなかで、現在、道德の評価方法や教科書検定の是非、授業を担当する教師の指導力など、道德の授業をおこなうためのさまざまな実践的課題について、盛んに議論がおこなわれている。それだけでなく、道德教育の理念や目的、さらには、指導の内容など、道德の本質にかかわることがらについても、改めて問い直す試みも見られるようになった。

家庭や地域社会の教育力の低下が叫ばれるなか、「道德の現代化」にも直結する今日の実践的・具体的な課題への対応は、確かに不可欠なことからである。そして、このことは、高度産業社会ということばに象徴される現代においてとりわけ重要なものとなる。なぜならば、田代尚弘が述べているように、「高度産業社会は教育環境の整備、教育の質的向上に寄与してきた反面、産業経済の論理が社会の道德的状況の歪み、道德的なリスクを生み出し、そのリスクの回避を道德教育の強化という形で学校に要請する」<sup>1</sup> からである。実際、学校の道德教育において、とりあげられるべき具体的な課題は、時代によって大きく変化する。たとえば、情報モラルやモラル・ハラスメントへの対応などは、まさに学校の道德教育における現代的な課題であると言える。しかしながら、道德には、普遍的・本質的なことがらが確かに存在する。それは、たとえば、自由や平等、幸福、正義など、時代と場所を問わず、誰もが追い求めてきたことがらについて、「道德」という概念を抜きにして語るができないということからも明らかにされる。そして、このことは、道德というも

のが一人ひとりの人間の生き方とそれぞれの社会の在り方という2つのことがらと不可分の関係にあること、したがって、道德教育は、個人がよりよいものとなるためにも、社会がよりよいものとなるためにも、共に不可欠なものであるということを黙示するものである。事実、ギリシアの時代にソクラテスによって立てられた「道德は教えられるのか」という問いが、これまで幾度となく問い直されてきた。道德が「古くて新しい問題」と言われるひとつの所以は、まさにここに存在する。

このように考えたとき、小原國芳の道德教育論を手がかりとして、今日の学校における道德教育の再検討・再評価を試みることは、きわめて重要な意義をもつものと思われる。それは、小原國芳の道德教育論には、「道德教育は機能していない」とまで評される今日の道德教育の混迷から脱却するための貴重な示唆が含まれていると考えられるからである。このことは、文部科学省「道德教育の充実に関する懇談会」の委員の一人である貝塚茂樹によって、「道德の時間」が形骸化し、活性化していない根本的な要因として、「戦後の教育改革において修身科や教育勅語が十分に清算されなかったこと」、さらには、「戦後の道德教育が政治的なイデオロギー対立に巻き込まれてしまったことで、そもそも道德教育は『どうあるべきか』という根本的な問いを立てることができなかった」ことが指摘され、戦前の修身科に関する優れた学問的な蓄積を戦後の道德教育に役立て、活用することの意義について述べられている<sup>2</sup> ことにも関連している。そして、学校の道德教育における戦前と戦後（言い換えれば、修身と道德）の断絶について、問題視しているのは、貝塚だけではない。たとえば、古川哲史も、「修身恐怖症と被教化者根性」のなかで、「戦争中に修身科が当局からいらまれて道義科という名まえの学科にふりかえられた事実」をひとつの根拠として示し、「わたくしは修身科はたくさんのエン罪をせおわされていると思う」と述べている。<sup>3</sup>

しかしながら、小原國芳の道德教育論において、ここで語られているような“断絶”は、皆無であると言っても過言ではない。それは、小原國芳の道德教育論の中心に位置する『道德教授革新論』が、もともと、1920年に『修身教授革新論』という表題で出版されたものであるということからも、端的に伺い知ることができる。すなわち、この著作を中心として展開される小原國芳の道德教育論からは、戦前と戦後（修身と道德）の断絶を乗り越えた道德教育における普遍的・本質的なことを読み解くことができると考えられるのである。

それにもかかわらず、小原國芳の道德教育論については、これまで十分な議論がなされてこなかったように思われる。もちろん、その背景のひとつには、先述したような学校における道德教育の戦前と戦後（修身と道德）の断絶とこれともなう修身科に対する誤解や思い込みがあると考えられる。しかしながら、それ以上に、小原國芳という人間の偉大なる個性への誤解や思い込みが、彼の道德教育論への着目を躊躇させてきたのではないだろうか。明星学園の創設者として知られる赤井米吉は、小原國芳について、「矛盾の人」と語り、「この矛盾のある一面を見て或るものは小原ファンとなり、あるものはアンチ小原となる。かかる『盲人の象評』の様な『小原國芳論』を私は屢々見る様な気がする」と述べたうえで、「偉大なる人間とはこの矛盾の幅の広いものこととすれば彼の如きはかかる意味に於ける偉人の一例であろう」と小原國芳を評している。<sup>4</sup> 赤井米吉の指摘する小原國芳という偉大なる個性への誤解や思い込みは、もしかすると、彼の道德教育論だけでなく、思想全般に対するある種の近寄り難さを感じさせるものなのかもしれない。実際、小原國芳の道德教育論に関する先行研究は、近年では、皆無といっても過言ではない。

ところで、小原國芳が道德教育を主題として記した著作としては、『道德教授革新論』『道德教授の実際』『道德教育論』の3つをあげることができる。これらのなかで、戦前に発表され、改版・改訂を重ね、戦後へと至るものは、『道德教授革新論』と『道德教授の実際』の2つである。このうち、『道德教授の実際』は、個人や家族、社会などの項目ごとに徳目が配列され、その解釈と例話が記されたものであり、どちらかと言えば、実践に直結したものとしてとらえることができる。これに対して、『道德教授革新論』は、小原國芳の道德教育論の根底にある理論や原理の主張に重点が置かれたものであり、それゆえに、彼の道德教育論の性

格をもっとも明瞭に現わすものとして位置づけることができる。こうしたことから、本稿では、『道德教授革新論』を中心に、小原國芳の道德教育論の一貫性と普遍性について考察することによって、その今日的意義を明らかにしていきたい。

## 2. 小原國芳の道德教育論の一貫性——『修身教授革新論』の改版・改訂を巡って——

小原國芳が道德教育論の根本や原理を中心として論じている『道德教授革新論』の原版となる『修身教授革新論』が著されたのは、1920年のことである。その序文によれば、この著作は、沢柳政太郎によって新教育の実験校として1917年に設立された成城学校に小原國芳が赴任して以降の研究成果のひとつであり、「講演の筆記」であるとされる。<sup>5</sup> それは、第1次世界大戦に勝利し、自由主義へと転換を始めたわが国の教育界において、これまでの学制以降の制度の見直しがすすめられ、これからの教育の方向性が模索されていた時代のことであった。とはいえ、強い国家統制のもとにあった当時の状況下において、『修身教授革新論』を公にすることは、小原國芳にとって、まさに喫緊の課題であったに違いない。それは、「今は到底二三年も待つことは出来ませぬ。自己の左右を見廻はす時、誰がジツとして居れませう。私はやはりヨハネの如く叫ぶのです。叫ばざるを得ませぬ。」<sup>6</sup> という序文のことも端的に現われている。時代の趨勢を敏感に感じとっていたからこそ、小原國芳には、西大久保の自宅に近い戸山ヶ原の陸軍の射的場からの筒音が「頑迷固陋な舊思想家達の古い〜迷妄を醒ます爆裂弾の音に聞え」<sup>7</sup> たのであろう。それゆえに、小原國芳は、この著作が学問的・組織的には不十分な点をもつことを認めながらも、「必ずや日本教育を救ふ何物かあること」、「系統的のものには到底見出すことの出来ないサムシングのあること」を信じて、この書を世に送り出したのである。<sup>8</sup>

第1回目の改訂は、1923年のことである。この時の「はしがき」からは、同年の関東大震災によって初版の紙型が焼失してしまったこと、それにもかかわらず、同書に対する地方からの需要がますます高まり、出版社である東成社の主人から新たに版を起すことを求められたことが、改訂の背景にあることを知ることができる。<sup>9</sup> これにともない、小原國芳は、「再び版を起すに際し、かねて、質疑や反問を受けた點にも答へたい。また、講演録であつたがために叙述の不備な點も多々あつた。それもかきかへたい。わづか二三年の

中に時代は恐しくも變つた。殊に今回の大事變は貴い幾多の教育を吾々に残した。それらを一々かきたして、再び出すことにいたします。」<sup>10</sup> と記している。実際、この時の改訂では、一部の標記が修正されるとともに、たとえば、「實際教育界を見渡して、殊に今回の大震災が生んだ甘粕問題や婦人問題の如き、實に感を深うするものが多い。」<sup>11</sup> など、わが国の災害史上最大級の被害を与えた関東大震災後の騒乱した状況下で起きたいくつかの事件についての加筆がおこなわれている。これに加えて、構成についても、第3章「修身教授の三方面」の第2節の表題が「情操の陶冶—感情の浄化」から「道徳的情操の陶冶の涵養と浄化」へ、第3節の表題が「知性の開發—批判力養成」から「道徳的知見の啓發」へと改められている。しかしながら、これらは、道徳教育に関する小原國芳の主張の変化を意味するものではない。それは、これらの修正や加筆が、あくまでも、形式的なもの、時勢にもとづくものに過ぎないからである。実際、この改訂において、各章・各節における記述の分量についても際立った増減は見られない。こうしたことから、今回の改訂が小原國芳の道徳教育に関する理論や原理の変化を意味するものではないことが明らかになる。

第2回目の改訂は、第1回目の改訂から10年後となる1933年のことである。この時は、書名も『修身教育論』に改められている。その「序」には、永く絶版となっていたが、しきりに再版を勧められていたこと、加えて、これぞという修身教授論が見当たらないことから、改題して再版したことが記されている。<sup>12</sup>このときの改訂について、小原國芳は、「十数年の今日、私の考にかなりの變化の來ましたことを切實に感じます。一日も早く訂正することの必要も感じて居ました。大半を書きかへて茲に直に公にすることの出來ますことを喜びともいたします。」<sup>13</sup>とも記している。確かに、この記述だけを見ると、今回の改訂が大きな加筆・修正をとまなうものと思われる。しかし、実際には、そうでない。まず、その構成について言えば、序言から第4章までと第7章は、各々の章における節の表題も含めて何も変更されていない。ただし、第5章「思想問題と修身教授」では、第3節の表題が「思想の本質、思想發展の形式」から「思想の本質 思想發展の形式」へ（すなわち、“、”が“ ”へ）、第4節の表題が「危険思想とは何か、思想に對する態度」が「危険思想とは何か。思想に對する態度如何」へ（すなわち、“、”が“。”へ、“態度”が“態度如何”へ）と、細微な修正が加えられている。また、第6章「方法論」では、

第4節の表題が「児童を輕視する勿れ」から「児童研究の必要性」へと修正されるとともに、第5節「教師の態度」が第7節へ、第6節「教育の秘訣十ヶ條」が第8節へと移され、第5節「無意識の感化と寓話」と第6節「教材論」が新たに追加されている。さらに、これまでにはなかった第8章「修身教授の徹底としての勞作教育」が新たに設定されている。次に、その内容についてみると、構成上の変更が見られない序言から第4章までと第6章の第1節から第3節、節の変更が加えられた第5章、節の転置がおこなわれた第6章の第7節と第8節については、前回の改訂同様、一部の標記についての修正や時勢をふまえた加筆が見られるものの、大きな変化は見られない。また、表題に変更のあった第6章第4節は、もともと1頁に満たないものであったが、9頁にわたる大幅な変更が加えられている。しかしながら、その趣旨は、「ゼヒ、児童研究、特に児童の青年の道徳意識や宗教意識研究をやつて下さい。」<sup>14</sup>、「實に、児童の發達の段階や、個性の相違や、家庭の事情や、児童道徳意識の特徴を出来るだけ精しく知悉して教育して欲しいのです。」<sup>15</sup>などの記述からも明らかにように、児童中心の修身教授を提唱するという趣旨に変わりはない。さらに、今回の改訂において新たに設定された第6章の第5節（6頁）と第6節（24頁）の内容は、おおむね、時代の趨勢によるものと考えられる。それは、第5節において述べられている“修身の教授における「童話、寓話、假作物語等」の必要性”と第6節において述べられている“教材である教科書及び「例話」の活用”に関する記述が、いずれも、「形式や方法上に新教育思想を引き継ぎ、児童中心的な考え方や生活教育の原理を取り入れたもの」でありながら、「内容は『忠良なる臣民』の育成を目的とし、忠君愛国の精神による皇国民の道徳を強調するもの」であった<sup>16</sup>と言われる「第4期国定教科書」への改訂（1924-1929）や「国民科修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キテ国民道徳ノ実践ヲ指導シ児童ノ徳性ヲ養ヒ皇国ノ道義的使命ヲ自覚セシムルモノトス」との「国民学校令施行規則」（1931）第3条の規定など、当時の超国家的・軍国主義的な色彩を強めつつあった状況をふまえてのものとして理解することができるからである。同じく、新たに書き加えられた第8章についても、「修身教授の徹底としての勞作教育」という表題のとおり、そもそも、修身教授の本質や根底に関わるものではない。以上のことから、第2回目の改訂もまた、小原國芳の道徳教育に関する理論や原理の変化を意味するものではなく、あくまでも形式的なも

の、時勢にもとづくものに過ぎないと理解することができる。

第3回目の改訂は、戦後の社会科による道德教育の効果が疑問視されるようになり、教育課程審議会（当時）に道德教育の在り方を中心とした教育課程の改正が諮問された翌年となる1957年のことである。この時は、『修身教育論』から再び『修身教授革新論』へと書名も改められている。その「序」には、「三度、敢えて、公刊するに際し」との見出しが設けられ、これまでの改訂の経緯をふまえた小原國芳の道德教育に関する基本的な考え方が示されている。それによると、道德教育において、小原國芳が「中道」を要求していることが明らかになる。すなわち、彼は、戦前・戦後を通して、教師に「中道へ、公正へ、真実へ、還って来て欲しい」と念願し続けてきたのであり、この主張は、首尾一貫したものであったと言うのである。<sup>17</sup> 小原國芳の主張は、戦前においては、教師が「無条件で軍国主義の御先棒をかついで」いたことから左に見られ、戦後においては、教師が「アメリカ張りからロシヤ臭くすなられとる」ことから右に見られた。しかしながら、それは、あくまでも相対的なことがらに過ぎない。それゆえに、小原國芳は、第1回目の改訂のときには「異端書」と評していたこの著作を第3回目の改訂において「永遠の書」、「予言書」と評しているのである。小原國芳によれば、「現代」（戦後、より正確に言えば、今回の改訂の時期）は、「自由がはきちがえられて、放縦となり、平等やデモクラシーが乱用され、あまりにも自己の利益のみに汲々とし公共の利益や福祉というものは顧みられず、悪平等、我儘、なまけ、ストライキとなり、伝統や規律や權威の尊さを了解せず、むしろ、敵視すらする」時代であり、「理想主義や精神主義が軽視され、現実と物質と打算と安逸とに墮落して来」た時代であるとされる。<sup>18</sup> 彼は、それゆえに、「当時（戦前、より正確に言えば、『修身教授革新論』がはじめて出版された時期：報告者註）以上に、宗教が、道德が、修身が、必要に迫られている」<sup>19</sup> と言うのである。ここに、『修身教授革新論』という著作を小原國芳が再び公刊した最大の理由があると思われる。それは、けっして新たな時代への適応を目指したものではない。この著作が「道德教育の根本や原理を明らかにすること」に重点を置いたものであり、「真理は永遠」なものであることによる。それゆえに、小原國芳は、「私の立場は今日でも変りませぬ。近来、新しい道德が主張されて居ますが、殆んどそのすべてはこの書がはじめて出た三十数年前、私が取り入れたもの

ばかりである」<sup>20</sup> と述べている。こうしたことから、今回の改訂においても、内容上の変化は皆無であることが十分に推察される。実際、今回の改訂にともなう構成上の修正は、前回の改訂において新たに加えられた第8章「修身教授の徹底としての劳作教育」が第6章「方法論」の第9節へと転置されたに過ぎない。また、同年には、『小原國芳全集』の第7巻として、『修身教授革新論』が『道德教授革新論』と書名を変えて出版されているが、これにともなう内容上の加筆・修正は、一切みられない。<sup>21</sup> ここに、小原國芳の『道德教授革新論』における一貫性が明らかにされる。

### 3. 小原國芳の道德教育論の普遍性——「道德教授の根本問題」を中心として——

戦前から戦後へという「激動の時代」を生きながらも、時流に飲み込まれることなく、小原國芳が道德教育の理論や原理について徹頭徹尾一貫した主張をおこなうことのできた理由は、そもそも、彼の教育論のすべてが「根本問題」を論じることから始められていることによるところが大きい。「万事は、根本問題から出発して下さい！」<sup>22</sup> という小原國芳の主張は、生涯をかけて「根本問題」の研究に取り組むことによって、教育界に尽くしたいという彼の不動の信念に裏づけられたものである。小原國芳のことは借りれば、それは、「要するに、根本問題としての真、善、美、聖の問題、すなわち哲学、道德、芸術、宗教」のことがらである。小原國芳が、京都帝国大学文学部哲学科の卒業論文である「宗教による教育の救済」を後に『教育の根本問題としての宗教』と改題して出版したこと、さらには、「根本問題」のなかでも、もっとも中心とされる人間研究の必要性を説く『教育の根本問題としての哲学』を著したことなどは、まさに、このような信念の表明に他ならないと言える。それは、米山弘によって、「『神は愛なり』『教育も愛なり』を実践し『教育の本道』に生きた人」<sup>23</sup> と評される小原國芳の生き方を端的に現わしている。

したがって、彼の道德教育論においても、まずはじめに、「根本問題」が問われることになる。それは、「真理は永遠」であり、「道德の形相は変わっても、その本質は永劫不変であり、峻厳そのものである」ことによるものである。<sup>24</sup> このような視座にもとづいて、『道德教授革新論』では、「善とは何か」「道德とは何か」「人生の目的とは何か」という3つが「道德教授の根本問題」として提示されている。小原國芳によれば、道德教育においては、「教案も段階も、教科書も例話も、何

はさておいて早くこれらの根本問題について徹底した深い解釈を得」<sup>25</sup> ることが必要であるとされる。それは、必然的に、一人ひとりの教師の抱いている「人生観」にもとづいて、道徳の教授がおこなわれるからである。「人と接する以上、そこに意識無意識の間に必ず何らかの感化作用が互に行われ」<sup>26</sup> るが、教師と児童の関係において、教師が児童に与える影響はきわめて重大なものとなる。それだけに、教師には「確乎たるしかも広い人生観」<sup>27</sup> が求められるのである。このような小原國芳の主張は、鯨坂二夫において、「道徳というような深刻の上もない課題に迫ろうとして、一つの理想主義的な立場を堅持する人に相応しい」<sup>28</sup> と語られる立場に立脚するものである。それは、たとえば、一般的には当時の国家の目的とされていた「教育勅語」を小原國芳が「いわば一つの徳目表であって、…。それらの徳目の内容は各自が各自の人生観で付与する…各自の自己をもって解釈していく」<sup>29</sup> べきものとしてとらえていることにも通じている。こうしたことから、小原國芳は、「根本問題」の解明を「人生観」について問うことから始めるのである。

小原國芳が述べるところによれば、「人生観」は、「厭世観」「楽天観」「厭世的進化論」「超越的楽天観」という4つに分類できるものとされる。彼は、それぞれの「人生観」について——小原國芳の多くの著作において見られるように——世界の著名な先達のことばを広く引用しながら詳細な分析を加えているが、そこから導かれるものは、人生を肯定的に受け止め、社会に尽くし、自己を磨き続けることの大切さである。それは、個々の人間の観かたによって、人生が異なる様相を呈するものであるということ、したがって、人生を明るく素晴らしいものとして観るためには、自らを高めることが不可欠であるということの意味している。このような前提にもとづき、小原國芳は、「人生の目的は何か」という根本問題に対して、「自己の本領を發揮すること」<sup>30</sup> という明確な結論を導き出している。ここで語られている「自己の本領」とは、「個性」や「人格」、「人間価値」ということばの意味するところと同じものである。また、「自己の本領を發揮する」ためには、「自覚」が必要であるが、これは、「自己の特性を覚り、天神を信ずる」<sup>31</sup> ことであるとされる。そして、小原國芳によれば、この「自覚」を可能とするのは、「第一義的生活」である。つまり、彼は、「自己の本領を發揮する」ところに「生活の真の意義」があると言うのである。ここに、教育の目的が、人生の目的と同一のものであるということ、さらには、職業の目

的とも一致するものであるということが明らかにされる。

続いて、小原國芳は、「善とは何か」という根本問題について論じている。ここでもまた、小原國芳は、これまでの善に対するさまざまな解釈を分類することから議論を始めている。それによると、これまでの善に対する解釈は、「他律的道德」と「自律的道德」、そして、「その間にどちらにも付かない、直観説」の3つがあるとされる。<sup>32</sup> 小原國芳は、ここでも、これら3つの解釈に詳細な分析を加えることによって、アリストテレスやパウルゼン、「仏教の大乗的の道」と同じく、「自律的道德」のひとつとされる「活動説」（「自我実現説」）の立場にもとづき、善を「哀心の要求を發揮すること」<sup>33</sup> と定義している。小原國芳によれば、ここで語られる「活動説」とは、「意志の命令に従うこと…。意志といっても、知情意三つに分けた意味の意志ではなくて、全人格の根本の意味で全人格の命令に従う」<sup>34</sup> ものとされる。それゆえに、善は、「我々全人格の要求」「哀心の要求」「第一義の生活」「最高原理の要求」「誠心の要求」、そして、「どこまでも第一義を伸ばして行くこと」とも言い換えられている。このことは、小原國芳において、善という概念が、最終的には個人的なことがらとしてとらえられているということを示唆している。しかしながら、それは、個人の勝手気儘を許すものではない。それは、善の追求が「自分の誠心の要求であるならば、よしんば他人がこれを何と言おうが、不道徳と言おうが、悪人と言おうが、断乎としてその道をとって進まなければならない」厳しさと、「汝自身を信ぜよ。されば、あらゆる琴線汝に共鳴せん」というエマーソンのことばに象徴される個性の奥底にある人間性への到達に他ならないということの意味しているのである。<sup>35</sup>

最後は、「道徳とは何か」という根本問題の探究である。ここでは、「神と禽獣には道徳なし。道徳は人のみにあり」というアリストテレスのことばが引用され、道徳という概念が、人間の二元性にもとづいてとらえられている。つまり、小原國芳は、人間を「赤い焼きつくような盲目的な底力のある根本動力」と「秋霜烈日、剣のような冷たい、真澄みの鏡のようなもの」、すなわち、「意欲」（＝煩悩、本能、自然とも言い換えられている）と「理性」（＝理知、思慮とも言い換えられている）とを併せ持つ存在としてとらえ、これによって必然的に生み出される「葛藤」や「苦悩」を乗り越えていくことが道徳であると言うのである。<sup>36</sup> ここでも、小原國芳は、分類という方法を駆使することに

よって結論を導いているが、それは、道徳生活において、理性も意欲も大きな人間が要求されるということである。なぜならば、理性も意欲も大きな人間にとって、自らの抱える「矛盾、葛藤、悶え、悩み」は、それだけ大きなものとなるが、それは同時に、道徳の高さを意味するからである。このことから、小原國芳が道徳を「内の問題であり、二元の葛藤の如何」<sup>37</sup>としてとらえていること、したがって、道徳もまた善と同じく、峻烈で困難をとまなう個人的なことがらとして位置づけられていることが明らかになる。小原國芳によれば、二元の葛藤の克服は、理性の力によるものとされる。すなわち、「底力強いムズムズした盲目的の意欲を、奔馬を御して行く」ことが「理性の使命」であり、人間ほんらいの姿であると、小原國芳は言うのである。それゆえに、小原國芳において、道徳は、「我々の意欲を導いて行くこと」、「自然の理性化」、「煩悩、意欲、本能、自然をば理知で正しく導くこと」とも言い換えられるのである。

以上のような「道徳教授の根本問題」に関する小原國芳の考察から明らかにされることは、彼のとりあげる「根本問題」は、単に人間の在り方・生き方と不可分な関係にある道徳の本質的な問題であるだけではなく、時代と場所を超えた著名な先達の思想や宗教の教理を駆使することによって結論づけられているということである。実際、『道徳教授革新論』における「道徳教授の根本問題」の議論に限っても、アリストテレスやリッパス、ヘーゲル、スピノザ、さらには、鴨長明や親鸞など、古今東西にわたるさまざまな分野の先達のことばが、数多く引用されている。しかも、それらは、単なる学術の方法論として使用されているわけではない。小原國芳は、まさに、彼らの人生観そのものとそれにもとづく彼らの在り方・生き方に着目しているのである。このことは、小原國芳の道徳教育論の核心が、彼の偉大なる個性というよりもむしろ、人間の普遍性にあることを示唆している。ここに、小原國芳の道徳教育論の普遍性を明らかにすることができる。

#### 4. おわりに——小原國芳の道徳教育論の今日的意義

それぞれの時代や場所において、さらには、その語り手によって、道徳の内容や方法は、異なる様相を呈する。それは、「価値観の多様化」「価値の転倒」などのことばによって特徴づけられる現代において、より明瞭なものとして現われる。何が善いことで、何が悪いことなのか。現代では、その内実について、実にさ

まざまに語られている。しかしながら、有史以来、いつの時代であっても、どのような場所においても、人間は、“よりよく生きる”ということ自らの課題としてきたはずである。それは、佐藤正明が指摘しているとおり、「人間がいついかなる時代にも善い生き方を求めて生きて来たということは疑うことのできない事実であり、道徳教育で先ず抑えておかなければならない前提」<sup>38</sup>としてとらえられなければならないことがらである。

それはまさに、村井実において、『『生き方』の混迷の時代』と語られ、『『善い』』ということが問われなくなった<sup>39</sup> 現代においても同様である。「人間は一生『善さ』を求めて生きないわけにはいかない」<sup>40</sup> 存在である。それゆえに、現行の学習指導要領においても、小学校の「道徳」においては「自己の生き方についての考えを深め」ることが、中学校の「道徳」においては「人間としての生き方についての自覚」が、それぞれ目標とされているのであり、高等学校においても「人間としての在り方生き方」についての言及がみられるのである。つまり、現行の学習指導要領において、小学校・中学校・高等学校のすべてにおいて、目指されている「人としての高次の在り方」を模索し、これを実現していくための力を育てるという道徳教育の目標は、人間が人間である限り、永遠の課題として掲げられるべきものなのである。

このことは、戦前から戦後へと至る激動の時代において、一貫性と普遍性を有する小原國芳の道徳教育論の今日的意義を根拠づける確かなことがらとしてとらえることができる。それは、たとえば、小原國芳が「道徳教授の根本問題」の考察に先立って「人生観」を論じることの必要性を指摘し、「我々は常に自己を啓き、出来るだけ深い確かなものになるように努めなければなりません。」<sup>41</sup> と述べていることと、現行の『高等学校学習指導要領解説 総則編』において、高等学校の道徳教育では、「生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観・世界観ないし価値観を形成し、主体性をもって生きたいという意欲を高めていく」ことが求められているということが、同様の趣旨をもつものであることから明らかになる。沼野一男は、『修身教授革新論』と時をほぼ同じくして著された『自由教育論』(1923)の一節を引用し、それが「字句や語法を変えれば、現在の教育雑誌からの引用といってもだれも不思議に思わないであろう。少し大げさにいえば、教育を改革しようとする人のいうことは、六十年前も今あまり変わっていないのである。」<sup>42</sup>と述べている

が、それは、そのまま、『道德教授革新論』（『修身教授革新論』）にもあてはまる。

実際、このほかにも、現行の学習指導要領における道德（さらには、道德教育）の捉え方と小原國芳における道德（さらには、道德教育）の捉え方には、きわめて多くの共通点を見出すことができる。「人間は、本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。この願いの実現を目指して生きようとするところに道德が成り立つ。」（『小学校学習指導要領解説 道德編』）、「内面的な葛藤や感動などを体験し、道德的価値の自覚を深めていくことによって道德性が発達する。」（『小学校学習指導要領解説 道德編』・『中学校学習指導要領解説 道德編』）、「どのような理想を描くかということが、その後の人生に大きな意味をもつことを理解し、生徒一人一人が、自分の夢や理想をしっかりと見つめ、その実現に近づけるように励ますことが大切」（『中学校学習指導要領解説 道德編』）、「道德性は人格の全体にかかわるもの」（『中学校学習指導要領解説 道德編』）、「人間の在り方に深く根ざした人間としての生き方」（『高等学校学習指導要領解説 総則編』）など、各学習指導要領解説の記述は、小原國芳の道德教育論における「根本問題」の議論に通じるところが大きい。

それだけに、小原國芳の道德教育論は、現在すすめられている「道德の教科化」に向けたさまざまな議論——とりわけ、特別の教科とされる「道德」の目的や目標に関する議論——において、多くの示唆を与えるものであると考えることができる。しかしながら、そのためには、『道德教授革新論』において語られている実際的・具体的な課題や教師論に関する詳細な検討はもちろん、この著作と同じく、戦前に著され、改訂を重ねて戦後に至る『道德教授の実際』（『修身教授の実際』）についての一貫性や普遍性についての解明が必要である。加えて、戦後になって発表された著作ではあるが、小原國芳自身が『道德教授革新論』（『修身教授革新論』）の「姉妹編」として位置づけ、「道德科特設論に反対する左派ばりのスネ者たちに対する破邪顕正の預言書」と自負する『道德教育論』についての検討も不可欠である。さらに、小原國芳が教育の理念として語る「全人教育」のもとで、道德の位置づけや意義を問うことも重要な課題となる。しかしながら、これらの課題をすべて一時におこなうことは、きわめて困難なことであるため、その検討については、今後の課題としたい。

## ○ 註

- <sup>1</sup>小笠原道雄・田代尚弘・堺正之編『道德教育の可能性——徳は教えられるか——』、2014、福村出版、4頁。
- <sup>2</sup>貝塚茂樹『道德教育の取扱説明書—教科化の必要性を考える』、2012、学術出版会、4-6頁を参照。
- <sup>3</sup>古川哲史・堀秀彦編『道德教育講座第1巻 道德教育とは何か』、1958、角川書店、91頁を参照。
- <sup>4</sup>小原國芳『人間小原論』（小原國芳全集32 [別巻]）、1965、玉川大学出版部、98-100頁を参照。
- <sup>5</sup>鯉坂國芳『修身教授革新論』、1920、集成社、1頁を参照。なお、1957年の改訂時には、この著作について、「ヒロシマ高等師範学校で大正七年に発表したものを、大正九年に、東京に来て私が前半生の精力を傾注して建設した成城学園の同人たちに講演したものを、本にしたもの」と記されている。
- <sup>6</sup>同上書、1頁。
- <sup>7</sup>同上書、2頁。
- <sup>8</sup>同上書、1-2頁を参照。
- <sup>9</sup>小原國芳『修身教授革新論』、1926、集成社、3頁を参照。
- <sup>10</sup>同上書、4頁。
- <sup>11</sup>同上書、4頁。
- <sup>12</sup>小原國芳『修身教育論』、1933、玉川学園出版部、1頁を参照。
- <sup>13</sup>同上書、1頁。
- <sup>14</sup>同上書、314頁。
- <sup>15</sup>同上書、319頁。
- <sup>16</sup>佐々木昭『道德教育の研究と実践』、1996、教育開発研究所、353頁。
- <sup>17</sup>小原國芳『修身教授革新論』、1957、玉川学園出版部、6-7頁を参照。
- <sup>18</sup>同上書、5-6頁を参照。
- <sup>19</sup>同上書、7頁。
- <sup>20</sup>同上書、7頁。
- <sup>21</sup>1958年に発行された第3回改訂版第三刷には、「『道德教授革新論』の改題について」と題された10cm四方の紙が付されていた。そこには、「『小・中学校では“修身科”と呼ぶがいい』という私の考えは今もなお変りませぬ。…。でも、国家として『道德科』ときまった以上、この際本書も『道德教授革新論』と改題いたします。」（一部抜粋）と記されている。このときは、表題のみが「道德」へと改められ、目次によれば、各章のタイトルは、すべて「修身」のままであった。その後、1980年に編集された『小原國芳選集』では、少なくとも、その目次において、「修身」ということばはすべて「道德」に改められている。
- <sup>22</sup>小原國芳『道德教授革新論・学校劇論・理想の学校』、1980、玉川大学出版部、11頁。

- <sup>23</sup> 皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』、1999、玉川大学出版部、59頁。
- <sup>24</sup> 小原國芳『道徳教授革新論・学校劇論・理想の学校』、1980、玉川大学出版部、11-12頁を参照。
- <sup>25</sup> 同上書、25頁。
- <sup>26</sup> 同上書、32頁。
- <sup>27</sup> 同上書、221頁。
- <sup>28</sup> 鯉坂二夫『小原教育』、1964、玉川大学出版部、59頁。
- <sup>29</sup> 小原國芳『道徳教授革新論・学校劇論・理想の学校』、1980、玉川大学出版部、24頁。
- <sup>30</sup> 同上書、32頁。
- <sup>31</sup> 同上書、34頁。
- <sup>32</sup> 同上書、41-42頁を参照。
- <sup>33</sup> 同上書、50頁。
- <sup>34</sup> 同上書、50頁。
- <sup>35</sup> 同上書、50-53頁を参照。
- <sup>36</sup> 同上書、60-66頁を参照。
- <sup>37</sup> 同上書、71頁を参照。
- <sup>38</sup> 佐藤正明『善い生き方の教育』、1983、玉川大学出版部、3頁。
- <sup>39</sup> 村井実『「善さ」の復興』、1998、東洋館出版、11頁。
- <sup>40</sup> 同上書、16頁。
- <sup>41</sup> 小原國芳『道徳教授革新論・学校劇論・理想の学校』、1980、玉川大学出版部、32頁。
- <sup>42</sup> 小原哲郎編『全人教育への道』、1987、玉川大学出版部、166頁。

○ 主要参考文献（註でとりあげたものを除く）

- ・小原國芳『道徳教育論』、1959、玉川大学出版部。
- ・島田四郎ほか著『道徳教育の研究』、1986、玉川大学出版部。
- ・文部科学省『中学校学習指導要領』、2008、東山書房。
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』、2008、日本文教出版。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』、2008、東洋館出版社。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』、2009、東京書籍。
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領』、2011、東山書房。
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 総則編』、2009、東山書房。
- ・梶田叡一編『教育フォーラム 52 新しい道徳教育のために 徳性をどう育てるか』、2013、金子書房。
- ・押谷由夫・柳沼良太編『道徳の時代をつくる！―